

# 後期旧石器時代後半期前葉における石材消費と製品製作の対応関係

## — 赤城山南麓から大宮台地を中心に —

小原 俊行

### 要旨

後期旧石器時代後半期前葉、V層・IV層下部段階の関東平野域における石器群の変遷は、前時期までの石刃製作技術構造の崩壊、角錐状石器や国府系ナイフ形石器に代表される西南日本からの影響、両面調整体の出現と石刃石器群の再構築、そして、これらの現象の背景にある生態学的・社会的な要素の構造変動といった様々な観点から論じられてきた。このような石器群の変遷のうち、石刃石器群が崩壊する段階の直後において、刺突具として想定される製品の中に大形品と小形品を組成する石器群が形成される。この現象は、石材運用戦略の適応として剥片モードの内の製品において大形品と小形品の疑似的二項性が出現した結果であると理解されてきた。また、大形品・小形品という二項的な製品の運用は、特に関東平野西域では、赤谷層黒色頁岩および高原山産黒曜石と伊豆・箱根産黒曜石を両極にして武蔵野台地を回帰拠点とした、南北往還内の石材運用戦略の一環にあるものとして把握され、その石材消費量はその採取地から漸減する現象にあるとされている。

本稿では、赤谷層黒色頁岩が河川礫として採取可能であったと想定される古利根川上流域に位置する赤城山南麓から大宮台地における石器群の内、大形品と小形品の製品が組成されるものを分析の対象とし、製品に用いられる石器石材と、遺跡内での石材の消費形態について把握した。その結果、大宮台地北部では、古利根川上流域の石器石材よりも、現在の中川筋以東で採取可能と想定される石器石材が卓越すること、信州系黒曜石を消費の中心とする遺跡内では、東北地方に原産地があると想定される石器石材や伊豆・箱根系黒曜石が極少数含まれ、大形品や国府系ナイフ形石器等の特徴的なかたちで遺跡内に搬入されていることが判明した。赤城山南麓の遺跡数の少なさ、遺跡内での石器点数の少なさも鑑みて、当該期の赤城山南麓に立地する遺跡の一部には、狩猟等の生態的な目的以外のものも含まれる可能性を指摘した。

### 1. はじめに

後期旧石器後半期前葉、所謂関東平野域におけるV層・IV層下部段階の時期は、ナイフ形石器・切出形石器・角錐状石器といった刺突具としての機能が想定される石器の形態に多様性や変異性が大きく認められる点が注目されてきた。この多様性・変異性については、前段階までに看取される石刃石器群の崩壊、角錐状石器や国府型ナイフ形石器等の西南日本からの石器製作技術の影響、後続する時期における両面調整体の出現といった観点から説明がなされてきた(角張 1991; 佐藤 1996; 田村 1992; 国武 2003)。

そのうち、当該期における刺突具と想定される石器には、最大長が5cmを超える大形のものと、最大長が3~4cmと比較的小形のものが共伴して検出されるものが一定数認められる。これは、当該期内の編年が細別される過程で、従前までの石刃石器群が崩壊することによって現れた、「疑似的二項モード」(安斎 2004)として理解されてきた。

本項では、特に黒色頁岩・黒色安山岩の石材採取地と想定され得る古利根川上流域における、赤城山南麓

から大宮台地で出土した該当石器群を取り扱う。これにより、従前までの石材消費形態の中での検討するべき課題を整理したい。

### 2. V層・IV層下部段階の大形製品製作の理解

V層・IV層下部段階の細別編年は織笠による研究(織笠 1987)をはじめ、伊藤(伊藤 1991)や西井(西井 1996)、亀田(亀田 1995・1996)らが行っている。

織笠が当該期にあたる武蔵野IIa期を新古二段階に区分する中で国府型ナイフ形石器と角錐状石器の出現と消滅が置換関係にあることを示した後(織笠 1987)、伊藤は織笠の2段階区分を基に、切出形ナイフ形石器の形態変化を中心にして当該期を4つの亜段階に細別した(伊藤 1991)。この中で、伊藤は大形品の出現について、V上亜段階に縦長剥片剥離技術の中から成立した切出形石器が、IV下亜段階において、大形品を主体として確立したと捉えている。

亀田は当該期を4時期に区分し、武蔵野台地における遺跡構造の変遷を追った(亀田 1995)。その際、伊藤の細別編年では言及の少なかった角錐状石器や、その使用石材、礫群の規模の変遷とも対応関係を求め

た。角錐状石器には安山岩製の粗い鋸歯円状の加工が施されるものと、チャート製の精緻な鋸歯縁状剥離とブランディングが施されるものの2形態があることを指摘した。そして、先行研究などの指摘(佐藤1970)を参照した上で、前者は後者に比べて先行して南関東地方に表出するものの、両者は共に南関東以外の地域で既に成立していたものとして捉えた。また、角錐状石器の形態変遷を3時期に区分し、関東平野域の集団における角錐状石器の製作に関する技術の受容・ナイフ形石器との技術的融合という過程を論じた(亀田1996)。

また、森先は主に織笠と伊藤の編年に立脚して田村の二項モード論(田村1989)を基に関東平野域での当該期の編年を構築している(森先2007・2010)。森先は当該期をV層下部期、V層上部期、IV層下部期の3時期に区分した。

森先によると、V層下部期の石器群は、技術構造の面では前半期の二項性が解体した状態を示すVI層期とは大きく異ならない。これに対し、V層上部期には体系的な石刃生産が全くみられなくなるという急速な変化を示し、剥片モード内部で縦長剥片剥離技術と横長・幅広剥片剥離技術が穏やかに二項性をなして、それぞれがナイフ形石器・尖頭形石器、尖頭形剥片石器・切出形石器と組み合っている。このうち、大形刺突具はほぼ縦長剥片剥離技術と結び付いている。一方、IV層下部期には縦長剥片剥離技術は小形尖頭形石器に素材供給を行う程度に留まって、大形刺突具(切出形石器・角錐状石器)から小形石器(切出形石器・角錐状石器)の大半が横長剥片剥離技術と結び付くようになる。

V層上部期には石刃生産が崩壊して臨機的な縦長剥片剥離技術や横長剥片剥離技術が発達する点と、IV層下部期においては角錐状石器と国府型ナイフ形石器が他地域と比較して大形化しないという点が、それぞれ読み取れるとされる。そして、その背景にはそれぞれ剥片モード内での二項化と、縦長剥片剥離技術の衰退が挙げられている。他地域と比較して角錐状石器と国府型ナイフ形石器が大形刺突具としての中心的役割を果たさない理由は、関東地方の石材分布構造が良質の石器石材を手短に入手できない環境下であった故に、石材的制約のある国府型ナイフ形石器や浪費の激しい角錐状石器よりも、従来の技術伝統の中で新しい適応戦略を成り立たせていく方法が採用された(森先2010)。

このような石器群の変遷に関する理解が整理されるのと並行して、当該期の集団の移動領域と生業戦略に関する問題や、遺跡間での石器製作の連関につ

いて扱った研究も進められている(角張1991;田村1992;野口1995・2007;国武2003)。

角張は石刃生産に用いられる石材が信州産黒曜石や東北地方産珪質頁岩か否かによって、移動領域の範囲を推定し、その上で機能を異にする遺跡を放射状に残す「放射型」と、同じ遺跡に異なる機能作業地点が同居する「循環型」の2種に分け(Marks1983、安斎1988)、移動領域の範囲との組み合わせによってローカルグループの居住パターンの変化を通時的に考察した(角張1991)。日常的に消費される石材が埋め込み戦略によって獲得されたという前提に立つことで、VI層段階から、V層・IV層下部段階にかけて移動領域が縮小するという現象を提示した。

田村は角張によって提示された理論的・方法論的前提を整備し、石器製作の技術構造と石材運用に変化が生じるのを単なる現象として捉えるのではなく、その背景にある自然環境や社会構造の変化も視点に含めた把握を目的として、V層・IV層下部段階から砂川期の居住形態の変化を分析した(田村1992)。埋め込み戦略に加えて、石材供給頻度の多寡も問題とし、最寒冷期に向かう中で細区画化すると推定される資源構造の変化を背景に、最適捕食理論(Torrence1989)に基づく分析から資源管理の問題を考察した。その中で、V層・IV層下部段階が相対的に高い移動頻度と安定した石材補給を示すのに対し、砂川期では大規模に重複する居住基地が出現し、それによって地域の生業資源が時間的・空間的に強化されるようになったとしている。

野口は上記の論点とは別に、後続する砂川期における遺跡群の理解(安蒜1985)を土台に、当該期を遺跡群の工程連鎖という視点から説明した(野口1995)。これにより、剥片剥離工程が原石から剥片剥離作業が展開する大規模遺跡を起点として、作業過程の一部が小規模な遺跡へと派生して行くものとされた。

国武は上記の細別編年と遺跡間の機能研究の両者を統合した上で、武蔵野大宮台地の当該期から砂川期にかけての石材消費戦略の変遷を追うことで、両面体調整石器群の由来を移動領域の縮小と絡めて論じた(国武2003)。

この中で国武は板状剥片から大形の製品が製作される点に着目しながら、IV層下部段階においては黒色頁岩と安山岩、不透明黒曜石を素材とする大形品と、黒色頁岩と安山岩、黒曜石を素材とする小形品という疑似的二項性が存在すると指摘している。そして、IV層下部段階における大形品の役割を、ナイフ形石器・角錐状石器の石材の入手と消費形態に基づいて評価し

ている。

これによれば、当該期は黒色頁岩・黒色安山岩の採取地である古利根川流域と伊豆・箱根の黒曜石産地の往還、もしくは高原山の黒曜石産地と伊豆・箱根の黒曜石産地を両極とする往還によって特徴付けられるとしている。大形のナイフ形石器や角錐状石器の製作は、このような両極に位置する原産地のいずれにおいても遠く離れている地域において、一定の大きさの素材剥片を入手するための石材補給の方法であったとしている。また、具体的には大宮台地南部から武蔵野台地にかけては、原石消費が漸減するとも捉えている。その背景には IV 層下部段階においては、関東平野の各台地を回帰地点とする集団の移動領域が縮小したことを想定している。そして、後続する V 層・IV 層下部最新段階において前段階の移動領域の変化に対応した石材獲得戦略が対応するとしている。

散漫ではあるが、当該期におけるナイフ形石器・切出形石器・角錐状石器に関する理解を整理すると以下の通りとなると考えられる。まず、大形の製品については、切出形石器も含めて縦長剥片剥離技術の中から成立したと捉えている。また、並行する時期に角錐状石器の製作技術が貫入してきていると捉えられる点である。この石器群の変遷は、それまでの卓越した石刃石器群における石刃製作技術構造が崩壊し、大形品と小形品を対照的に組成する「疑似的二項モード」が出現すると理解されている（安斎 2004）。

また、この大形品・小形品の疑似的な二項性という現象は、移動領域の縮小に伴って発生したと考えられる。このような大形品は素材となる板状の大形剥片を消費する過程で製作される。この大形品の製作過程には、そこから生じる剥片を素材として小形品の製作が行われることから、大形品の運用は単純に製品製作のみを目的としているのではなく、石核としての運用等、多義的な目的が含まれると想定される。但し、この状態は移動領域の縮小に伴って後続して現れた石器製作技術の適応化の中で、継続して採用されなかったというように理解され得る。

筆者は、石刃石器群の崩壊から両面調整体等への石器製作技術の再構築の過程で、この理解は再検討をする必要があるとも考えているが、一旦これを所与のものとして捉え、赤城山南麓から大宮台地の石器群の中で、該当するものを整理したい。これにより、黒色頁岩・黒色安山岩の原礫を採取したと捉えられる古利根川上流域における、当該期集団の行動の背景が、より鮮明な形で追究することが可能となるであろう。

以下では、その地域における当該期における環境を

改めて整理したのち、石器群の検討に入る<sup>1)</sup>。

### 3. 「赤城山南麓—大宮台地」という地域

関東地方南部の V 層・IV 層下部段階は、赤城山南麓では群馬 5 期編年（小菅・大工原・麻生 2004）のうち III 期に該当すると捉えられている（関口 2008）。本期は浅間板鼻褐色軽石群（新井 1962；町田・新井 1992・2003；関口・下岡・早田 2011；以下、As-BP Group と表記）層中から石器群が検出され、前後する時期、及び関東平野内の他地域と比較して、遺跡数とその規模は極端に減少することで知られている（小菅 1994；小菅・中島・軽部 1996；小菅・大工原・麻生 2004；小菅・西井 2011）。一方、利根川を挟んだ大宮台地では、大宮台地編年 II 期に該当し、遺跡数は爆発的に増加する（西井 2004）。

赤城山南麓から大宮台地の地形は現在、利根川と加須低地によって分断されており、地形的に連続しない。しかし、これは関東造盆地運動による関東平野中央部の沈降運動と、その後の利根川の流入によって形成されたものである（堀口 1981・1993；菊池 1981）。

松田による荒川低地と中川低地の地下地質の調査によって、これらの低地の地下には深さ 30～40m に達する深い埋没谷地形があることが判明している（Matsuda 1974；菊池 1981）。対照的に、現在の利根川に沿う加須低地には、沖積層基底の時代、すなわち最終氷期の海面最低下期において、特に大きな谷が形成された痕跡が見当たらない。そのため、かつての利根川が加須低地を流れて谷を刻んだ事実がなく利根川は荒川筋を流れていたと考えられる（菊池 1981）。

V 層・IV 層下部段階は最終氷期最寒冷期に相当する。この時期において、大宮台地は館林へと続く「大宮～館林台地」として地形が形成されていた（堀口 1993）。また、この台地の東西には荒川谷と中川谷が形成されており、最終氷期最寒冷期においては河川の浸食作用によって高低差 30～60m に達する峡谷になっていたと考えられる（堀口 1993；菊池 1981）。

これらのことから、後期旧石器時代の赤城山南麓から大宮台地は現在とは大きく異なる景観を呈していたと考えられる。群馬地域と大宮台地の両地域は個別に扱うのではなく、包括的検討が必要とされるという認識は以前からある（田代 1997；西井 2004）。本稿でもその認識の基、分析を進める。

### 4. 石器群の分類

大宮台地の当該期石器群については、西井が分類

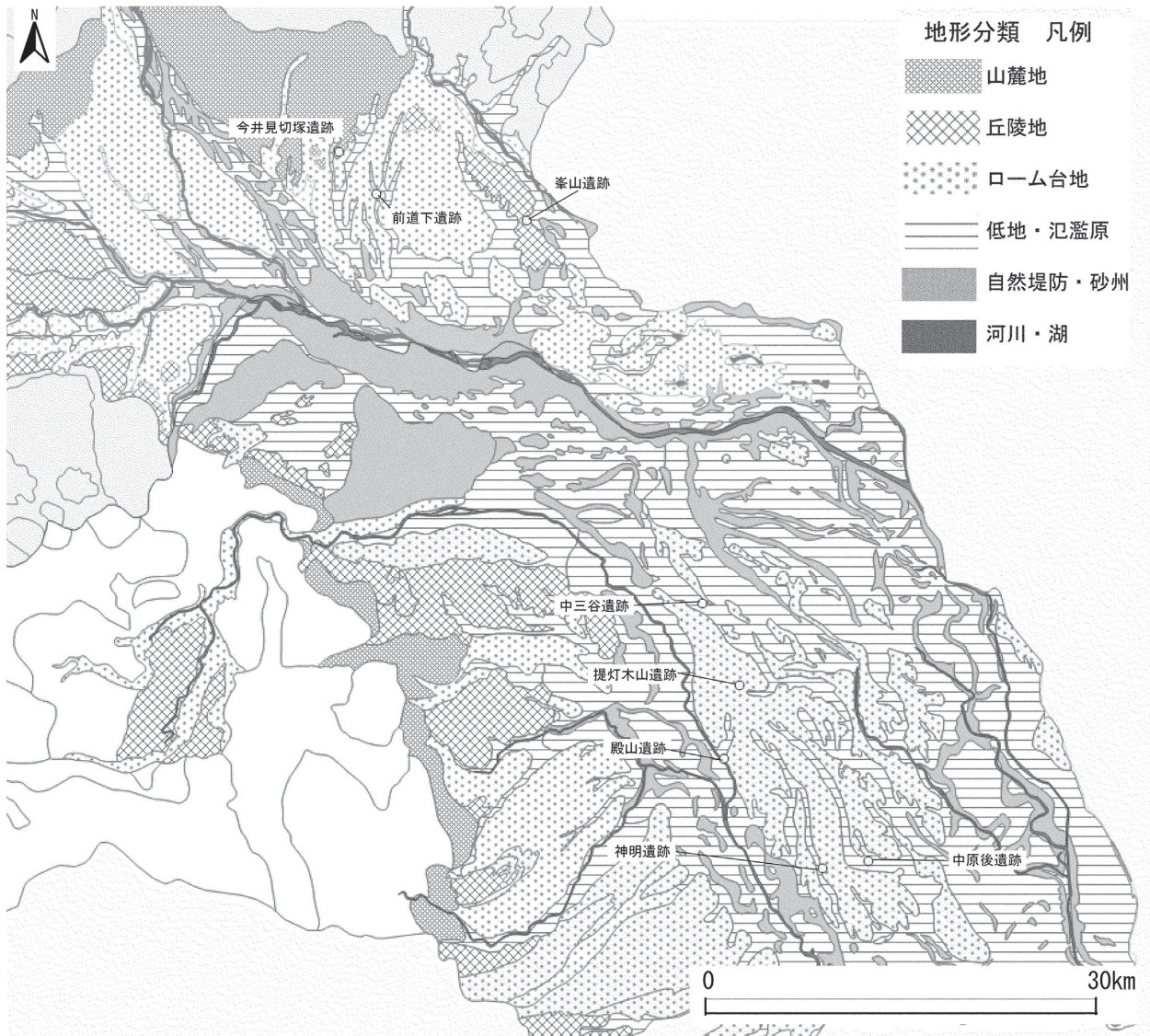


図1 分析対象遺跡

を行っている（西井 1991・1996・2004）。西井氏は当初、本地域内での石器群の分類に時期差を想定していたが（西井 1991・1996）、近年の分類案（西井 2004）の内容では時期差について保留している。近年の分類案に従うと、本地域内での石器群は a～d 群の 4 つに分類することが可能とされている。

そのうち、大形品と小形品が共伴する石器群は a 群と b 群である。a 群は、殿山遺跡第 1 次調査や提灯木遺跡第 3 文化層などの石器群である。この石器群には国府型ナイフ形石器、切出形石器、黒曜石製のナイフ形石器を組成することが特徴とされる。また、出土する黒曜石製のナイフ形石器は、縦長剥片を素材に打面部に基部を残すことが特徴とされる。また、b 群には提灯木遺跡第 2 文化層、中原後遺跡の石器群が挙げられる。これは大形の角錐状石器と切出形石器を複数含む点が特徴とされる。また、これに伴うかたちで

小形のナイフ形石器を組成する。石器石材には頁岩やチャートが主に用いられる。

以前筆者は、赤城山南麓の始良 Tn 火山灰降灰以降（町田・新井 1976）から当該期石器群について編年案の構築を目的とした分類を行った（小原 2016）。そのうち As-BP Group 層中で検出される石器群に、大形品が認められるものがある<sup>2)</sup>。

以下では、両地域の石器群を検討する。

## 5. 石器群の検討

以下では、赤城山南麓と大宮台地の該当する石器群をそれぞれ分析する<sup>3)</sup>。なお、分析対象の遺跡の分布は図 1 のとおりである。

### 5-1. 赤城山南麓の石器群

赤城山南麓では前道下遺跡 C 地点（群馬県埋蔵文

化財調査事業団 2008)、今井見切塚遺跡第 III 文化層(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007)、峯山遺跡第 1 文化層(群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009)が該当する。これらの遺跡が立地するのは、赤城山南麓でも比較的標高の高い地域になる傾向がある。特に、今井見切塚遺跡や峯山遺跡については、大間々扇状地の周縁部に位置する、多田山丘陵や八王子丘陵といった丘陵上に立地する遺跡である。以下では、各遺跡内の製品の石材とその消費形態との対応関係を概観する。

#### ・前道下遺跡 C 地点(図 2)

出土層位が不明であるものの、礫群を伴う石器集中部が 1 カ所検出されている。本石器集中部では、黒曜石等の遠隔地で採取可能な石器石材は見受けられず、黒色安山岩と黒色頁岩といった、古利根川流域で採取可能と想定される石材のみで構成されている。

大形の角錐状石器・ナイフ形石器が欠損品も含めて 7 点出土している(図 2-1～6)。これらの製品のうち、4 点が欠損品である。黒色頁岩製のものについては接合資料が得られている(同図-5, 6)。

他の黒色頁岩製の剥片の接合資料(同図-7, 8)と合わせてみると、この遺跡には黒色頁岩の原礫を直接持ち込んでおらず、ある程度調整の進んだ状態の大形剥片を遺跡内に持ち込み、製品の製作・修繕を行った可能性が高い。これに対し、黒色安山岩は大形剥片ではあるものの、黒色頁岩よりも原礫に近い状態で遺跡内に持ち込んでいたと考えられる(同図-9)。黒色安山岩製の剥片・石核類とナイフ形石器・角錐状石器が直接接合する資料はないが、製品の製作が行われていた可能性はある。

#### ・峯山遺跡第 1 文化層(図 3)

出土層位は As-BP group 中・上部付近が中心である。報告では 4 つの石器集中部に区分されている。

総点数 373 点の石器が出土し、石器の殆どは諏訪産・和田峠産の信州系黒曜石で構成されている。切出形石器・角錐状石器等の製品は 5cm を超える大形品(図 3-1～3)と、2～3cm 程度の小形品(同図-5～10)で構成される。

大形品は箱根産・信州系黒曜石や黒色安山岩製で、いずれも単独母岩の石材であることから、搬入品であると考えられる。小形品は信州系黒曜石製で、その殆どが長さ 3cm 程度の大きさにまとまる。母岩消費としては、信州系黒曜石を板状の原礫を持ち込み、板状原礫の長辺側を打面に設定して幅広の剥片を製作して

いる(同図-4)。但し、この母岩はその消費過程において、途中から縦長剥片剥離に切り替えられている。小形の製品とこれら剥片・石核類は直接接合しないが、小形品の素材の形態からも、上述の母岩消費の流れの中で製作されたものであると推測される。

#### ・今井見切塚遺跡第 III 文化層第 1a 地点(図 4)

礫群を伴って 17 カ所の石器集中部が検出されている。出土層位は As-BP Group 最下部である室田軽石(森山 1971、以下 MP と表記)と As-BP Group 中部の間層を中心である。

石器総点数は 370 点であり、その殆どが蓼科・和田峠産といった信州系の黒曜石によるものである。縦長剥片を素材とする黒曜石製のナイフ形石器・角錐状石器、珪質頁岩製の横長剥片素材の切出形石器が認められる(図 4-1, 2, 4)。接合資料から、信州系の黒曜石や赤碧玉製の拳大の原礫、板状の信州系黒曜石の原礫を素材として、石刃状の縦長剥片を製作しており、その一部でもナイフ形石器・切出形石器等の製品を製作していたことが伺える(同図-5～7)。

また、切出形石器に珪質頁岩製のものが認められる(同図-3)。これは単独品であることから搬入されたものであると考えられるが、その色調から東北地方に原産地があるものと推定される。

#### ・今井見切塚遺跡第 III 文化層第 1b 地点(図 5)

礫群を伴って 7 カ所の石器集中部が検出されている。出土層位は 1a 地点と同様、As-BP Group 最下部(MP)と As-BP Group 中部の間層が中心となる。

1b 地点では 75 点の石器が出土している。これらの内、石器石材は黒色頁岩が多数を占め、黒色安山岩、黒曜石と次ぐ。黒曜石は 8 点中 6 点が蓼科産であることから、信州系黒曜石が大半を占めると言える。しかし、箱根畑宿産黒曜石の極小の石核と、剥片が各 1 点認められる(図 5-3, 7)。

石器ではナイフ形石器・切出形石器・角錐状石器がそれぞれ出土している。ナイフ形石器・切出形石器の大形品・小形品は両方とも黒色頁岩が用いられている(同図-1, 2)。また、角錐状石器も欠損品ではあるが、黒色頁岩を用いて製作されている(同図-4)。これら黒色頁岩の消費形態としては、円礫を分割した大形剥片を遺跡内に搬入していたことが伺える。

### 5-2. 大宮台地の石器群

大宮台地において、該当する遺跡の中では、中山谷遺跡(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989)、提

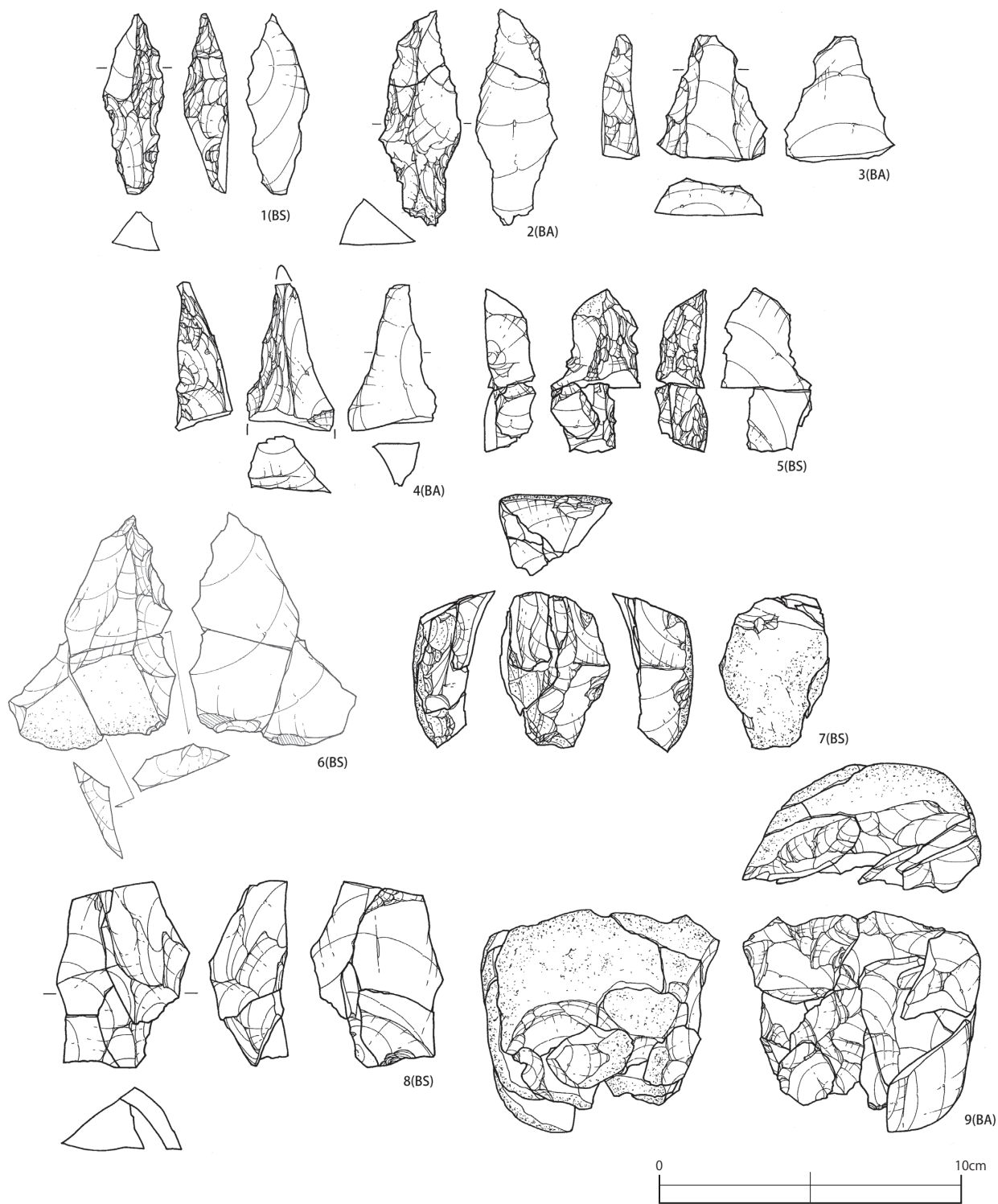


図2 前道下遺跡C地点

灯木山遺跡第2文化層（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990）、神明遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987）、殿山遺跡第1次調査地点（上尾市教育委員会 2004）などが挙げられる。西井の分類では、殿山遺跡第1次調査地点と提灯木山遺跡第2文化層、中原後遺跡はそれぞれ別のグループとなるが、これらは

いずれも大形品と小形品によって組成されることから、今回は暫定的に一括して取り扱うこととする。

・提灯木山遺跡第2文化層（図6）

石器集中部が4カ所、近接して検出されている。出土層位は立川ロームVI層相当層より上面が中心となる。

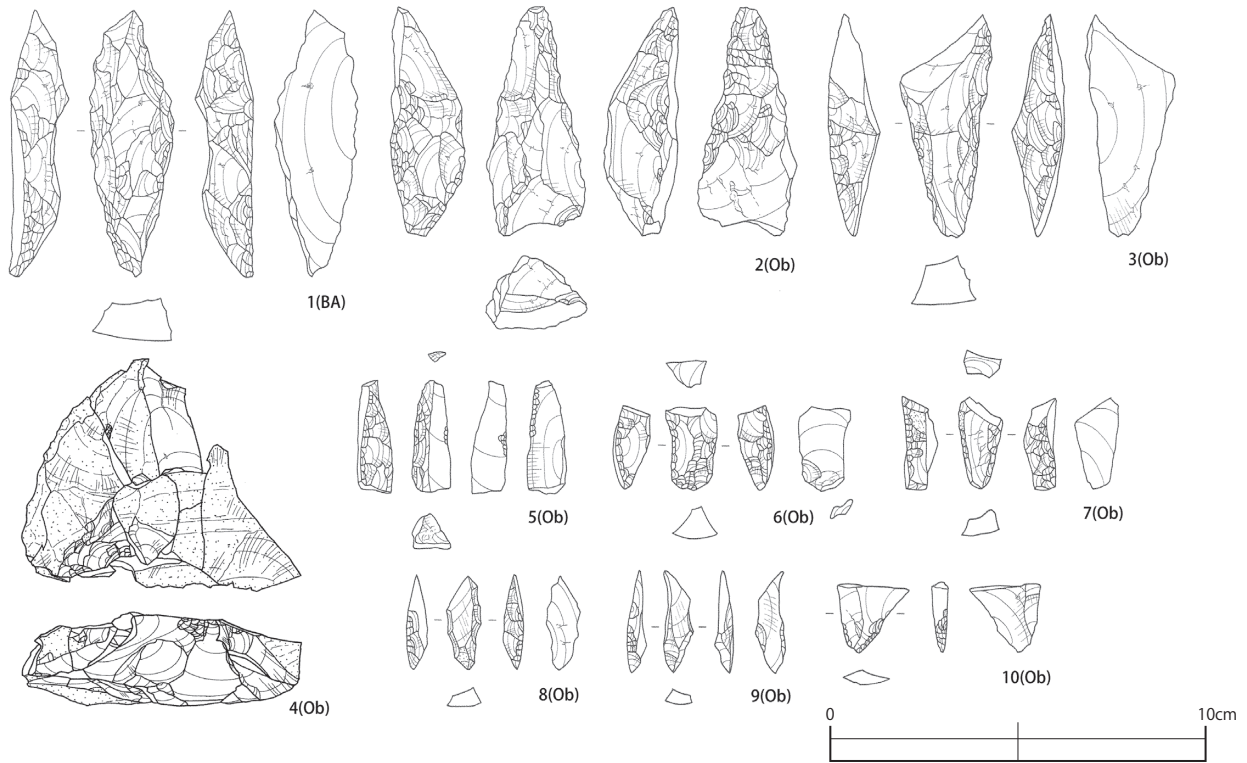


図3 峯山遺跡第1文化層

出土石器総点数は 293 点であり、礫群と共伴して検出されている。主要な石器石材はホルンフェルス、本遺跡では同一母岩のホルンフェルスが用いられた国府系ナイフ形石器と角錐状石器（図 6-1, 2, 3）が出土している。

また、これらのナイフ形石器・角錐状石器と同一母岩の石核が 2 点共伴して出土している（同図 -17, 18）。この石核のうち、1 つは円礫面が残存する。

加えて、石刃・石刃状の縦長剥片が認められるが（同図 -13 ~ 16）、石材は黒色頁岩・黒色頁岩・黒色安山岩・珪質頁岩が用いられている。これらの剥片はその背面構成から、いずれも連続して石刃・縦長剥片を作出する工程の中で製作されたものであると考えられる。特に、頁岩製の縦長剥片は残存する礫面の形状から、この剥片が円礫を素材に製作されたものであることが伺える。しかし、これらの縦長剥片はいずれも搬入品であると考えられる。

石器石材は、ナイフ形石器等の珪質頁岩の一部に、鹿股沢層産のものと推定されるような石材が認められる（同図 -9, 10, 11, 12, 16）。また、肉眼観察によるものではあるが、同図 -4 のナイフ形石器に用いられている不透明な黒曜石は、高原山産のものであると推測される。

その他、原産地は不明であるが、赤い斑点模様のあ

る珪質頁岩を素材としたナイフ形石器（同図 -7）や、同一母岩の剥片類が多く認められる点が特徴である。

これらのことから、本遺跡に用いられている石器石材は、信州産と考えられる透明の黒曜石製の角錐状石器（同図 -6）が 1 点認められるものの、概して現在の中川筋以東に原産地のあると考えられる石器石材が一定認められる。また、ホルンフェルスの原産地は不明であるが、円礫の礫面が残る石核から、近傍の河川流域で採取したものと推定される。

・神明遺跡（図 7）

石器集中部が 1 カ所検出されている。出土層位は報告書内で具体的に言及されていないが、暗色帯の上位部分を中心に出土したことが読み取れる。

出土点数は 72 点であり、用いられている石器石材はホルンフェルス・チャート・珪質頁岩が主体となっている。ナイフ形石器・切出形石器は長さが 5cm 程度になる大形のホルンフェルス・頁岩製のもの（図 7-1.4）と長さ 3cm 程度のやや小形のチャート・ホルンフェルス製のもの（同図 -2, 3, 5）があるが、いずれも搬入品であると考えられる。特に、大形の切出形石器（同図 -1）は、提灯木山遺跡第 2 文化層のものと色調が類似する。また、背面に残存する礫面から円礫を素材とすることが伺える。



図4 今井見切塚遺跡第III文化層第1a地点

搔器が2点出土しているが、この石器に用いられている石材は珪質頁岩製である(同図-6, 7)。碎片類にこれら搔器と同一母岩と見受けられるような石器石材が多い。そのため、神明遺跡では、積極的な石器製作は行われておらず、その調整等が行われたのみであると推定される。

これらのことから、本遺跡に用いられている石器石材の採取地域は、概して提灯山遺跡第2文化層と類似する傾向にある。また、ホルンフェルス(角閃岩)の原産地は不明であるが、円礫の礫面が残存することから、近傍の河川流域で採取したものと推定される。

・中山谷遺跡(図8)

立川ローム第1暗色帯相当層を中心に、石器集中

部が2カ所検出されている。

出土総点数は72点である。これらの石器は黒色安山岩・黒曜石・メノウといった石材が中心である。大形の角錐状石器・ナイフ形石器・切出形石器にはそれぞれ頁岩・黒色安山岩が用いられている(図8-1~3)。また、黒色安山岩については、遺跡内で拳程度の円礫を素材にして、母岩消費が行われていることが接合資料から伺える(同図-9)。黒曜石は不透明で斑晶の顕著なものが用いられており、小形のナイフ形石器(同図-5)や、剥片類(同図-6~8)、剥片素材の石核が検出されている。これらの剥片・石核類に残存している礫面の形状が平坦であることから、搬入された黒曜石の原礫は板状のものであったと推測される。原産地は不明であるが、遺跡の立地や、他の石材の構成を勘



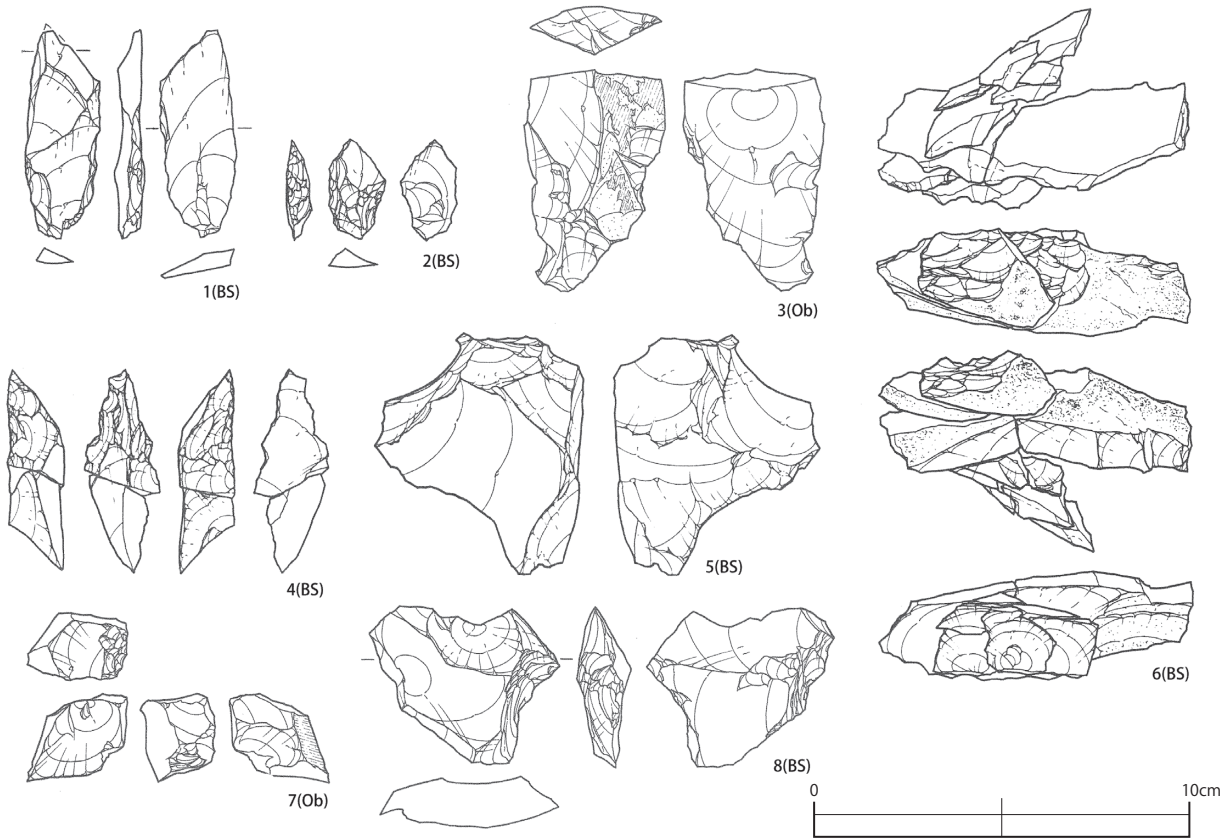


図 5 今井見切塚遺跡第Ⅲ文化層第 1b 地点

案すると、高原山産のものであると推定される。また、メノウ製の石器としては、ブロック状石核とその接合資料が認められるが（同図-11）、ナイフ形石器等の製品には認められない。黒色安山岩が用いられる製品については、同図-2 と 3 が同一母岩であるのに対し、同図-2 のものは剥片類の接合資料と同一母岩であると考えられるため、用いられる石材が若干異なる。

これらのことから、本遺跡に用いられている石器石材は、信州産と考えられる透明の黒曜石製の角錐状石器（同図-6）が 1 点認められるものの、現在の中川筋以東に原産地があると推定される石器石材が一定認められる。また、ホルンフェルス（Hornfels）の原産地は不明であるが、円礫の礫面が残る石核から、近傍の河川流域で採取したものと推定される。

・殿山遺跡第 1 次調査（図 9）

暗色帯上位からソフトローム層中にかけて、総点数 877 点の石器が出土している。石器集中部は大小合わせて 7 カ所設定されている。

出土している石器の大多数は黒曜石製である。その殆どが蓼科産であり、その他の黒曜石の原産地も和田峠産・諏訪産であることから、黒曜石のほぼ全てが信

州系であるといえる。これらの黒曜石の母岩消費は、接合資料は少ないものの、残核の形状から、板状の原礫を搬入して縦長剥片を製作するものと（図 9-11）、大形剥片を素材として幅広の剥片を製作したもの（同図-13）が認められる。板状の原礫から製作された剥片のうち、大形のもが更に石核の素材に転用されたと考えられる。これらの黒曜石製剥片からは小形のナイフ形石器が製作されている（同図-6～10）。黒色頁岩も僅かに出土しているが、板状の剥片を素材として消費が行われていたことが伺える（同図-12）。

また、これらの石器と共伴してメノウ・チャート製の国府系ナイフ形石器が出土している（同図-1～4）。黒曜石製のナイフ形石器とは対照的に、遺跡内での製作した痕跡は認められず、いずれも搬入品であると考えられる。また、メノウについては新潟県域に原産地が推定されると報告されている。

6. 考察

前項で確認したことを総合すると以下のとおりとなる。現在確認できる範囲内で整理するならば、黒色頁岩・黒色安山岩を直接原礫状態で持ち込んで、母岩消費から石器製作まで一貫して行っている様相が認

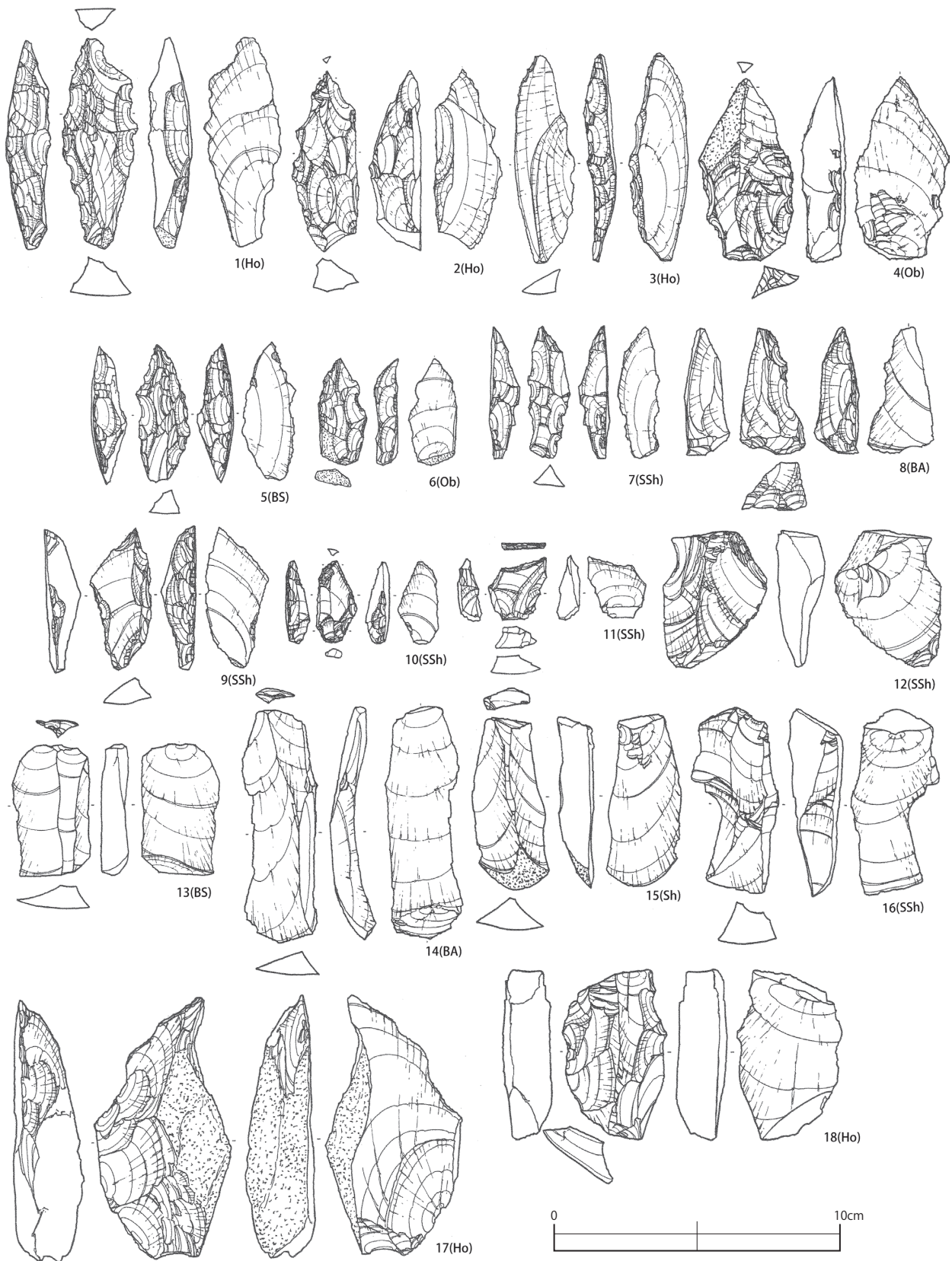


図6 提灯木山遺跡第2文化層

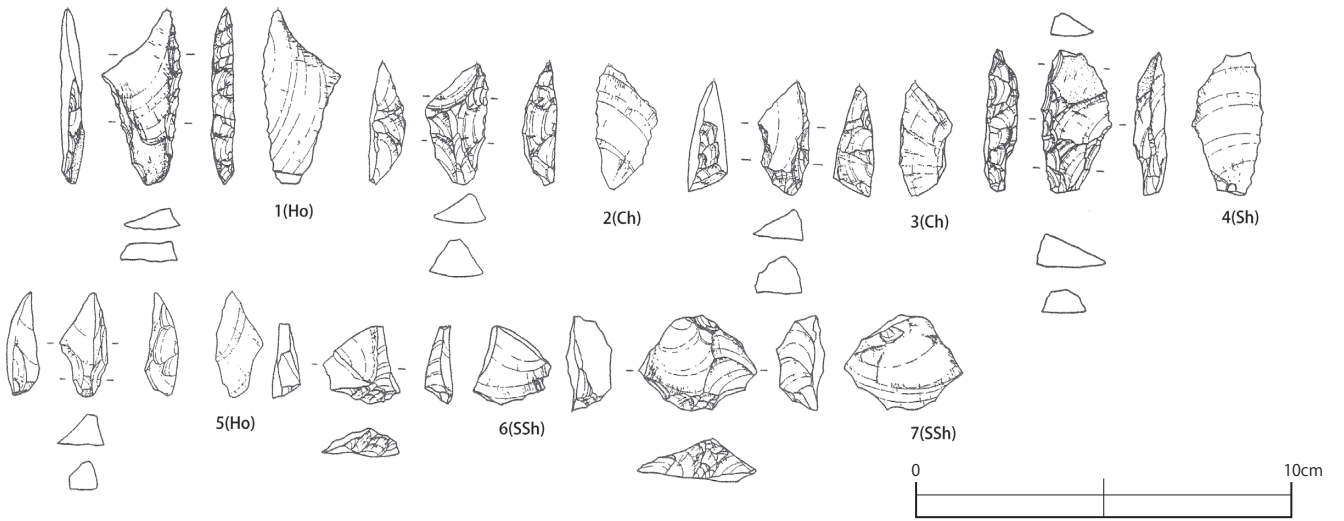


図 7 神明遺跡

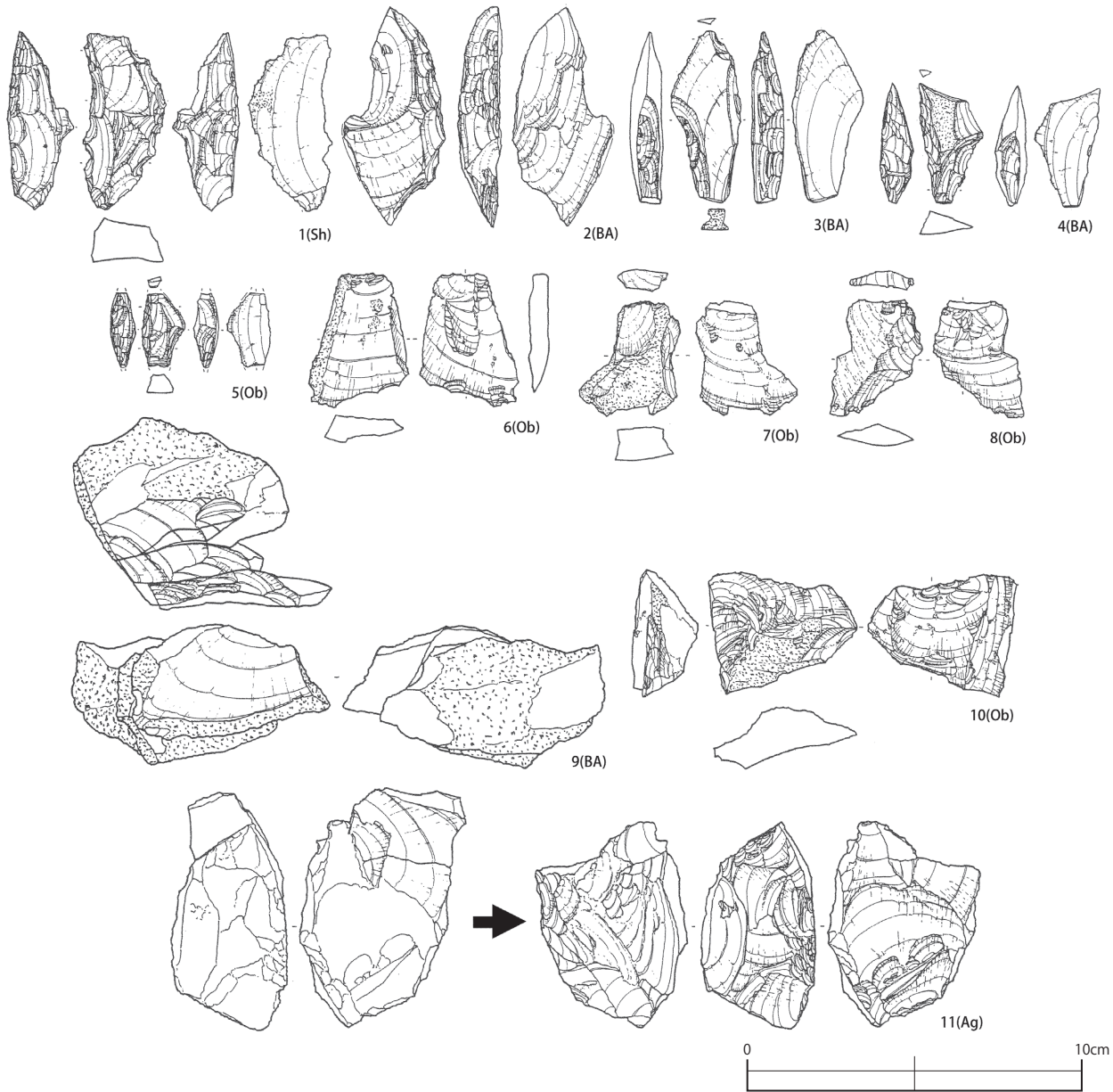


図 8 中三谷遺跡

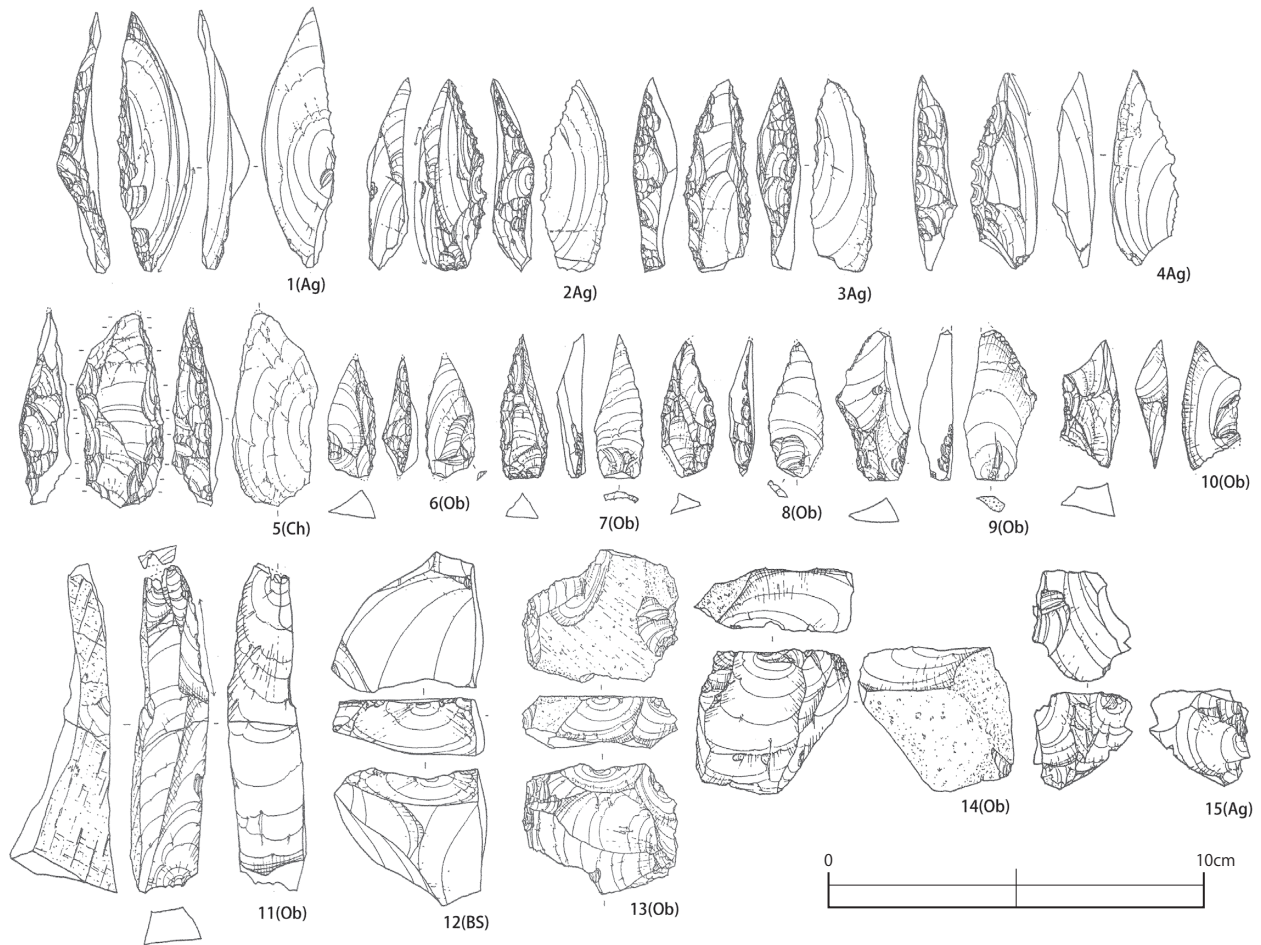


図9 殿山遺跡

められるのは、前道下遺跡 C 地点、今井見切塚遺跡第 III 文化層第 1b 地点である。しかし、前道下遺跡 C 地点では黒色頁岩は大形剥片の搬入状態から消費を開始しているのに対し、黒色安山岩を分割礫の状態から搬入しているという若干の違いが認められる。加えて、今井見切塚遺跡第 III 文化層第 1b 地点においては、黒色頁岩を分割礫の状態を持ち込んでいる点、同一母岩から角錐状石器の製作・修繕を行っている状況が読み取れた。黒色頁岩・黒色安山岩の両石材を近似する採取地から搬入したと考えると、採取地点である程度加工を施したと考えられる。

また、その他に黒色安山岩を原礫に近い状態を持ち込んでいると考えられる遺跡については、大宮台地南端部に位置する中原後遺跡（浦和市遺跡調査会 1994）が挙げられる。古利根川上流域から本遺跡まで原礫を直接採集して持ち込むには距離が離れ過ぎている。また、黒色頁岩は大形剥片の状態でも遺跡内に持ち込み、製品製作に用いていると考えられる。そのため、黒色頁岩・黒色安山岩の母岩消費は、原産地付近から消費地に向かって漸移的に消費量が減少する傾向にあると

いうよりも、ある種の飛び地的な消費の在り方をしていると捉える方が妥当であると考えられる。

大宮台地の北部では、中山谷遺跡、提灯木山遺跡において、ホルンフェルスの消費が認められる。この石材自体の原産地は不明であるが、その他の不透明黒曜石やメノウの存在から、これらの採取地は現在の中川筋川以東のものであると推定される。加えて、神明遺跡でも、提灯木山遺跡と類似する石材の消費が見られることから、これらの遺跡間の類似性は高いといえる。

よって、これらのことを勘案すると、大宮台地内での黒色安山岩・黒色頁岩の母岩消費は関東平野南西部に向かって漸移的に減少傾向を示すというより、その消費の仕方は飛び地的なものであること、また、大宮台地北部においては現在の中川筋以東の石材が認められる傾向にあると考えられる。

次に、峯山遺跡第 1 文化層、今井見切塚遺跡第 III 文化層第 1a 地点、殿山遺跡第 1 次調査等の、黒曜石を多量に消費する傾向のある遺跡について検討する。

これらの遺跡について共通する点は、蓼科・諏訪・和田峠産等の信州系黒曜石が石材構成の殆どを占める

中で、角錐状石器・ナイフ形石器・切出形石器の大形品が、主要石材と産地を違えて搬入されている点、これらの石器が国府系ナイフ形石器であったり、切出形石器の中でも大形品であったりと、いずれも製品中に特徴的な位置を占めるものであるといえる。加えて、これらの石器石材は、殿山遺跡第 1 次調査や今井見切塚遺跡第 III 文化層第 1a 地点で認められたように、東北地方に原産地が推定され得るような石器石材が用いられているといえる。

但し、峯山遺跡については、天城産黒曜石であることから、若干傾向は異なるかもしれない。今井見切塚遺跡第 III 文化層第 1b 地点についても箱根産黒曜石の搬入品が認められるが、これらは剥片・石核類である。また、今井見切塚遺跡第 III 文化層第 1a 地点では、高原山産黒曜石が極小な残核の状態で認められる。そのため、関東平野南西部に原産地のある石器石材については、必ずしも大形品等の特徴的な製品が搬入されている訳ではない。

## 7. まとめ

本項では赤城山南麓から大宮台地の中で認められる、当該期の石器群の中でも、大形品と小形品の製品が共伴する石器群を主に取り扱ったが、その消費形態は武蔵野台地などの石材消費地に向かって漸減するというよりも、飛び地的な消費形態があることが判明した。

勿論、石材採取を直接的に行ったと想定され得る古利根川上流域付近の状況が不明であるため、これ以上の追究は今のところできない。しかし、古利根川流域以北に当たる赤城山南麓において、遺跡数・遺跡内での石材消費量が、大宮台地南部以南と比較しても圧倒的に少ない遺跡が形成された理由について、予察程度に検討したい。

これらの遺跡の中で認められた傾向としては、信州系黒曜石の消費が卓越する遺跡内において、東北地方に原産地が推定される石材や、箱根産黒曜石といった、遠隔地において採取可能な石材が、極少数ながらも搬入されているという点、それらの中に大形品や国府系のナイフ形石器等、特徴的な形態のものが含まれているという点である。遺跡数・遺跡内での総点数が少ないため、これらの地域に当該期集団が累積的に来訪したとは今のところ考えがたい。また、大宮台地北部における同時期の石器群の石材構成が、その南北の地域とは石材構成が異なる点においても、赤城山南麓に形成された遺跡が、単なる生業域の外縁部であるという理解以上の想定が必要になることを傍証しているよ

うに思われる。このように、信州系黒曜石が大部分を占める遺跡において、ごく少ない点数の石器石材が含まれる点、これらの中に東北地方と関連の強い石材が一定の割合認められる点は、これらの遺跡が形成される中で、生業的な役割以外のものも含まれていた可能性がある。

但し、これについては、現在のところあくまでも可能性であることから、想定範囲内を出ないことは言うまでもない。今後、関東平野南西部及び、信州、東北地方の石器群の理解も含めて、改めて検討しなければならない。

## 謝辞

本論を執筆するにあたり、資料の実見の際には以下の機関の方々にお世話になった。感謝申し上げたい。(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団、さいたま市教育委員会、上尾市教育委員会

また、指導教官である佐藤宏之先生には日頃から御指導いただいている。感謝申し上げる次第である。

## 〔註〕

- 1) 「角錐状石器」として分類されるものの中には、「複刃厚形削器」(赤澤・小田・山中 1980; 田村 1992) 等の刺突具以外の機能が想定されるものも含まれるため、概に単一の機能的実体を伴うものとしての疑いがあるが(森先 2010)、本論ではそれに該当し得るものは対象から外し、「角錐状尖頭器」(森先 2010) に該当し得るものを扱う。
- 2) 本来これらの石器群を体系的に整理するためには赤城山南麓～大宮台地内、しいては関東平野全域全般の石器群における分類案を再構築する必要がある。そのため、今回の検討が暫定案であることは、予め断っておく。
- 3) 図中での石器石材の略称は以下のとおりである。  
BA = 黒色安山岩、BS = 黒色頁岩、Ch = チャート、Ob = 黒曜石、SSh = 珪質頁岩、Sh = 頁岩、Ag = メノウ、Ja = 碧玉、Ho = ホルンフェルス

## 引用文献

- 赤澤威・小田静夫・山中一郎 1980 『日本の旧石器』立風書房  
上尾市教育委員会 2004 『殿山遺跡』  
新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学研究紀要 自然科学編』10-4 :1-75  
安斎正人 2004 「東北日本における「国府系石器群」の展開—槍先形尖頭器石器群出現の前提—」『考古学』2:1-40  
安藤政雄 1985 「先土器時代における遺跡の群集的な成り立ちと遺跡群の構造」『論集 日本原史』:193-216 吉川弘文館  
伊藤健 1991 「ナイフ形石器の変異と変遷」『東京都埋蔵文化財センター 研究論集』10:81-107

- 浦和市遺跡調査会 1994『中原後遺跡発掘調査報告書（第2次）』  
織笠昭 1987「国府型ナイフ形石器の形態と技術（下）」『古代文化』  
39-12:15-30  
角張淳一 1991「黒曜石原産地遺跡と消費地のダイナミズム—後期旧  
石器時代石器群の行動論的理解—」『先史考古学論集』1:25-82  
亀田直美 1995「武蔵野台地V層IV層下部段階における遺跡構造」『古  
代探叢IV 滝口宏先生追悼考古学論集』:1-15  
亀田直美 1996「角錐状石器」『石器文化研究』5:189-198  
菊池隆男 1981「先史時代の利根川水系とその変遷」『アーバンクボ  
タ』19:2-5  
国武貞克 2003「両面体調整石器群の由来—関東地方V層・IV層下  
部段階から砂川期にかけての石材消費戦略の連続性—」『考古学』  
1:52-77  
国武貞克 2008「回廊領域仮説の提唱」『旧石器研究』4:83-98  
国武貞克 2015「黒曜石の獲得からみた関東・中部地方の移動領域」  
『旧石器研究』11:79-96  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『今井三騎堂遺跡—旧石器時代編  
—』  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『今井見切塚遺跡—旧石器時代編  
—』  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『前道下遺跡（2）—旧石器時代  
編—』  
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『峯山遺跡I—旧石器・縄文時代  
編—』  
小菅将夫・大工原豊・麻生敏隆 編 2004『群馬の旧石器』みやま文  
庫  
小菅将夫・中島誠・軽部達也 1996「北関東地方」『石器文化研究』  
5:101-114  
小菅将夫 西井幸雄 2011「関東地方北部」『講座 日本の考古学 1  
旧石器時代 上』:354-380 青木書店  
小原俊行 2016「関東地方北西部における浅間板鼻褐色軽石群降灰  
期の石器群」『岩宿フォーラム 2016 ナイフ形石器文化の発展  
期と変革期—』:28-41  
小原俊行 2017「後期旧石器時代後半期前葉の赤城山南麓から大宮  
台地における小形ナイフ形石器の研究」『群馬県埋蔵文化財調査  
事業団 研究紀要』35:1-10  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987『神明・矢垂』  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989『中三谷遺跡』  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990『提灯木山遺跡』  
佐藤達夫 1969「ナイフ形石器の編年的一考察」『東京国立博物館紀  
要』5:23-76  
佐藤宏之 1996「社会構造」『石器文化研究』5:329-340  
関口博幸 2008「後期旧石器時代における前橋泥流をめぐる遺跡形成  
史」『岩宿フォーラム 2008 更新世の地形発達史と遺跡群の形  
成』:36-43  
関口博幸・早田勉・下岡順直 2011「群馬の旧石器編年のための基  
礎的研究—関東地方北西部における石器群の出土層位、テフラ  
層序、数値年代の整理と検討—」『群馬県埋蔵文化財調査事業団  
研究紀要』29:1-20  
早田勉 1992「群馬県の自然と風土」『群馬県史 通史編』1:37-129  
田代治 1997「大宮台地の概要」『埼玉考古』別冊 5:7-13  
田中英司 1993「旧石器時代の遺跡」『中川水系 人文』:5-15  
田村隆 1992「遠い山・黒い石—武蔵野II期石器群の社会生態学的  
一考察」『先史考古学論集』2:1-46  
西井幸雄 1991「南関東地方における武蔵野台地第IV下層～第VI層の  
ナイフ形石器」『埼玉考古学論集』:63-89  
西井幸雄 1996「V～IV下層段階の細分」『石器文化研究』5:341-352  
西井幸雄 2004「大宮台地における石器群の変遷」『山下秀樹氏追悼  
考古論集』:75-84  
野口淳 1995「武蔵野台地IV下・V上層段階の遺跡群—石器製作の  
工程配置と連鎖の体系」『旧石器考古学』51:19-36  
堀口萬吉 1981「関東平野中央部における考古遺跡の埋没と地殻変  
動」『地質学論集』20:79-94  
堀口萬吉 1993「第3節流域の変遷 2台地の形成とその変遷」『中  
川水系 総論・自然』:164-167  
町田洋 新井房夫 1976「広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰  
の発見とその意義—」『科学』46:339-347  
森先一貫 2007「角錐状石器の広域展開と地域間変異—西南日本後期  
旧石器時代後半期初頭の構造変動論的研究—」『旧石器研究』3  
:85-109  
森先一貫 2010『旧石器社会の構造的変化と地域適応』六一書房  
森山昭雄 1971「榛名火山東・南麓の地形—とくに軽石流の地形につ  
いて—」『地理学報告』36-37:105-116  
Matsuda,I 1974 Distribution of the Recent Deposits and Buried  
Landforms in the Kanto Lowland, Central Japan. Geographical  
Reports of Tokyo Metropolitan University,9:1-36.  
Torrence, P. 1989 Retooling: towards behavioral theory of stone  
tools. Time, energy and stone tools :57-66  
Marks, A. E. 1983 The middle to upper Paleolithic transition in the  
Levant. Advances in World Archaeology 2:51-98

# **The Study of the relationship of lithic raw material consumption and lithic technology in the first term of later half of upper paleolithic period**

## **-in the Southern Foot of Mt.Akagi-Omiya Plateau Area-**

Toshiyuki KOHARA

The temporal transition of lithic technologies in the first term of later half of Upper Paleolithic period in Kanto Plain has been discussed from various perspectives; the collapse of the technological structure based on the blade production, the influence lithic technologies from southwestern Japanese, the emergence of biface and so on. Among this period, stone tools which have been supposed hunting tools like spear formed large size and small one, and these tools were utilized together. This phenomenon has been understood as the result of the strategical adaptation of lithic material availability.

In the western region of Kanto Plain, the lithic raw materials were operated within the round trips which have mainly two lithic raw material resource areas; one is the black shale of Akaya formation - Mt.Takahara's obsidian area and another is Izu-Hakone obsidian area.

In this article, I analyzed the products and these consumptions of raw materials located in the Omiya plateau -the southern foot of Akagi mountain; a part of western region of Kanto Plain. As a result, in the northern part of the Omiya plateau, the raw materials which is supposed to be able to be collected in the eastern area of Kanto Plain is more prominent. Within the sites in which a large part of lithics are made of Shinshu obsidian, it is found that lithic raw materials which have origin in the Tohoku region or Izu-Hakone area are included and they are carried into the sites in a characteristic form such as large-sized hunting tools. Considering that there are only small number of site on the southern foot of Mt. Akagi and each site has a few lithics, the possibility can be thought that the sites located in the area may include something other than ecological purpose.